

# 琉球大学学術リポジトリ

## 巻頭言：教育実践のリアリティ

|       |                                                                                                                  |
|-------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: ja<br>出版者: 琉球大学大学院教育学研究科<br>公開日: 2018-07-02<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 小田切, 忠人<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/41585">http://hdl.handle.net/20.500.12000/41585</a>                  |

## 巻頭言

### 教育実践のリアリティ

教育学研究科長 小田切忠人

平成 28 年度に設置した「教職大学院」の一期生が修了することになりました。ですから、本報告書は、本学における「教職」をキーワードにする専門人材を養成する、文字通り第一歩の足跡となるものです。修了生にとっても、教育現場で教育実践を切り拓いていく、新たな第一歩になるものと期待します。

修了生の最終報告を見ると、「協働的」、「チーム」、「主体的」・「対話的」・「深い学び」、「マネジメント」、「ICT」、「コミュニケーション能力」、「協働的な学び」、「言語活動」、「思考力」・「判断力」・「表現力」、「複雑化」・「深刻化」、「コーディネート力／ファシリテート力」、「社会参画」、「伝統」、「興味・関心」、「評価」などのキーワードが含まれています。これらは、次期学習指導要領に向けた改訂論議の中で、教育実践課題を語るときに用いられてきた、また、これからの教育実践課題を語る時に用いられるであろうキーワードです。

ところで、「教職大学院」は、「理論と実践の往還」を、その専門性を語る時のキーワードにしています。このキーワードが、研究成果が教育実践に役立つもの、結びついたものであることに止まるならば、それはつまらないものになってしまうと思います。この「往還」は、教育実践の「リアリティ」を問うものである必要があると考えています。教育的な営みにおいて、上で述べたキーワードのような教育的価値を掲げることを否定するものではありません。しかし、それらを掲げるだけでは、教育実践の内実を創り出すことはできません。「今」の、現に目の前にいる子どもたち一人ひとりと正面から向き合った楽しさ、あるいは、苦しさ、また試行錯誤し迷う教師としての自己を、ありのままに受け入れ対象化しつづけることが不可欠です。たとえば、「主体的・対話的で深い学び」は、目の前の学級の子どもたちにとって、また教師の私にとって、どんな意味があるのだろうか、と。

修了生の課題研究報告を改めて見ると、自らの教育実践を振り返り、そのように問い返してきた様子がかがわれます。何が成果かと、結果を急ぐ必要はないと思います。教育実践というものは、そういうものです。直ぐ現れる成果よりも、じわじわと現れる成果こそを大事にし、教育現場で共有していけたらと期待します。